

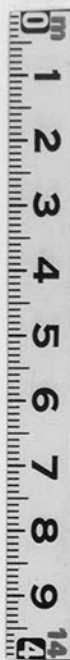
文藝雜誌

昭和廿二年六月一日印刷
六月十日發行「文藝」第一卷第二號

文藝

たのしい小説特集號

第 2 號



短篇集

蟹と詩人

河内潔士著 宮澤皓装幀

(二三圓・B六型和紙装)

〔内容〕

中河與一先生

御推稱の一節より――

- 1 悪魔と作家
 - 2 山小屋夜話
 - 3 蟹と詩人
(第一部・第二部)
 - 4 義賊と役人
 - 5 火の女
 - 6 寫實主義
- ……總じて河内君の作品は熱情的といへる。やゝ荒けづりであるがその體験の多彩と一生懸命さが讀む者をひきはつてゆく。(中略)人生に新しい希望と夢とを與へようとする焦燥に近いまでの熱意には信用していいものがある。それに河内君はまだまだのびることの出来る作家である。この作品集が、どんな批評をうけるか知らないが、自分は心から河内君の前途に期待するものである。

發行所 仙臺市長町大窪谷地五二一

啄庵書房

腐敗せる文學界へ、便乗商人作家へ、抗議の結集！

純文學季刊叢書(單行本形式)

『日本抒情主義』發刊近し

――執筆者――

折口 信 夫 萩野 卓 司
山田 野 理 男 保 永 貞 夫
澁 澤 均 吉 村 英 夫
小 池 吉 昌 河 内 潔 士
三 島 由 起 夫

發行所 東京都日本橋

かに書房



評論

愛情の戒律

後藤 一六

(1)

俳句雜考

金澤 隆志

(3)

春

額賀 誠志

(7)

繪になる詩

均 澤 澁

(9)

しらゆきに歌ふ

小池 吉昌

(10)

海上の鴉

保 永 貞 夫

(10)

言論の注射

プロテスタント

(11)

鼠

管 田 甫

(13)

人間の馬鹿

青 柳 生 兒

(15)

女房祭り

河 内 潔 士

(22)

創作

愛情の戒律

後藤 一六

人間の原罪を被い、忘却の哲理を説き、位階観にうらづけられた人間權威を構築し新しい創造と稱するヒュムニテイに到達したナチスなりファウシュヨナりの在り方は同時に普遍的なデモクラティク乃至はアリストクラティクな人間性解釋に對する一つの大寫的敗北であつたといえる、個人的にはどれだけかめられたヒュムニテイにしろ、それが大寫の意志という流れと檢討するときそこに何等かの人工創造というデマゴギー！こゝに民族主義が登場する——が存在せねばならぬある悲劇を藏している、

シヨベンハイル流の狂態的な迄の苦惱を必要とする生命燃焼に、大寫なり民族なりが堪へないとする判斷からこのような理念が生み出されるものと解される、同時にそれは個人にも移向された一つの型である、終戦後の國に訪れた自由という鐘の音は實に政治的な方面よりむしろこのような内在的個人我の反省を警告したものと私は考える、

一例をとつて統一と没我と集團の魅力、或いは個人が民族にかける悲劇の激しい意志的無意志——戦争中を要約するなら——にあつて男女間の愛情を考えるなら今日の逢瀬は明日の別離になるという慌しい制約のうちに行為していた、そこに特有の斷哲學と悲劇哲學を味つ

て個人我の轉機を幸とし、偏向的に神々のアウフヘーベンを楽しんだといえる

一度このような環境から脱するや、この國の男女はそれのもてる權力の一切を傾けて解放された愛情の到來を告げ、自由即自己解放即自己満足——さらに説明して自己聖化イズム——に到達した、或る者は太陽の如く女を愛せと極言し、親子の情は男女の愛に通ず數人愛するもよしと論ずる、こゝに到らない迄もこの間の消息を疑いつゝ愛情の彷徨期を續けている、

結論から私の考えを云うと、愛情の戒律、制調化された愛情をここにおいて強調したいのである、

それは前述のファウシュヨ的愛情觀——空間的な制約、つまり所與的外相的制約から發生する——にもどることでなければ、倉田百三ばりの唯一と掲げる自己犠牲やら、涙、感謝論の典型に入れるものでもない、

或いはブラウニングの至上觀から来るオンリー・ワン・ワンズでもない、

私は一人の男と一人の女との眞實な戀愛の営みは、人生という時間的過程に於ける宿命の出會なりとしたい。永遠につながるたつた一つの微けんな契機としたいのである

即ちそれは、一度味覺した愛情の、聖態を永遠に守り

抜こうとする最も自主的な行動性を求めているのである。即ち二人の戀愛なり結婚の生活が双方の意志の上で破綻に歸したとき、さらに新な對象を見出すのが正しいヒューマニティなりとする一般の意見は、その歴史的過程を批判するとき、どちらかに最初の美しい愛情に對する眞實危殆の營みがさやかなりとも率直に認められる故に反撥出來た、その様な通俗の見解が双方に既に豫定條件理念としてなる場合、最初の出會は不能であり愛情への反逆とも云える、自ら選んだ對原物の聖化を自らの行爲により企及しようとする逞しい行動的なヒューマニズムはこの様な男女間愛情の中に嚴肅に存在する美しく正しい強い攝理であると信ずる。

自由詩、散文詩、より戒調詩、制調体にはより多くの秘められた眞實と激しい意志なり謙虚な美德がある、内在する叫びがある、訴えが嚴存する。

それは制作者の生命燃焼的實感を經た表現である、愛情の戒律がむしろ豊かな人生を傳へ、さらに美しい人生を表現することは、それが、自由詩の評價に一石を投ずる制調体のように、双方の崇い祈りと精進から昂められた永遠に通ずる高貴性に外ならない。

かかる内在的、生命的行動的、戒調化された愛情形態が、ぼう頭に引例のフアツシヨのヒューマニティと根本的にその立場を異にし、内容の相反することは以上の説明で明らかである。

愛情の戒律がフアツシヨ、ヒューマニティのアイロニー

俳句雜考 金澤隆志

「俳句藝術はやつて見なければ分らず、手を染めた者でなければ、到底その俳句の持つ醍醐味などの味はれやう筈がない」と、いはゆるいつぱし俳人氣どりの連中が昂然と囁ぶ。この意味は、俳句といふものはやつて見れば誰でも分るが（鑑賞出來得る域に達するといふ意味ばかりではなく、どんな者でも容易に作句出來るといふ意味含む）やつた者でなければ誰にも分らぬ（鑑賞すら出來得ないばかりではなく、どんな知的標準に達した者でも皆目分らぬといふ意味含む）俳句とはかういつた奇麗な要素を含んだ藝術なのである。

私は曾つて友人の宅に於けるレコードコンサートに招かれ、その席上、ある音楽に非常に感激を覺えたことがある。會が終つてから友人にその曲名を聞いたところ、それはチャイコフスキの「悲愴奏鳴曲」とメンデルスゾーン「ヴィオリン協奏曲」だといふことを知らされた。又大學の應用化學研究室のある友人（この友人は曾つて小説などといふものは讀んだためしがなく、したがつて文學で云ふ抒情的精神などの片鱗だにもうかがはれぬ頭の持主）が、はじめて讀んだ小説ドストエフスキの「罪と罰」「ヘルマン・ヘッセの「デミアン」カロッツァの「挨拶と信從」等の讀後感を非常な感激を以つて話したことがある。

私は只單に、偶然的な而も曖昧貧弱なこれだけの實例

的産物でもなければ、封建的遺性でもないことは明かであり、その孤高の絶對値が民族を斷ち、國家に終焉を與えるの犠牲においても樹立されることも明らかな事實である。

それが戀愛至上觀の生んだ消極相から、ヒューマニティの素直な意志を代表した積極的前進であるといえる、ニイチエの意志論を引例するならば「神すら意志である」と云つた彼の告白には無限の内在的苦悶の結晶を表現している故に崇いのであり、これをローゼンベルグのナチス哲學が外相的批判から巧妙に利用し、民族的ヴェールの下にヒューマニティの破壊を行い、悲しむべき中世的枯死の洗禮を世界に與えしめた事實は、私の強調する愛情の戒律が、行動的ヒューマニズムなり意志から出發し、永遠につらなる意義が、その批判に於て同じく双方の見解をもつであらうけれども、以上の説明により正しいニイチエの解釋が生れることを信ずる。

祖國ににぶく存在する武斷型、——青年の霸氣と稱し感激というもの——、青年の日和見と稱し中間的知性というもの——これらは青春の彷徨を代表するヒューマニズムの退歩である、

これらにビリヤドをうつものこそ正しい愛情の解釋でありその實踐である、前述の愛情の戒律がこれらの晩鐘を告げる青春の塔に新鮮な感覺と理念を與え、ポテンシャル情熱とともに、美しく激しく晩鐘を捧げること念うものである。

をもつて來て、傑作の永久性普及性と、俳句藝術に於ける特異性を對比せしめやうとは思はない。が而し、俳句藝術はその創作の過程に於いては、いかなる未知な者でも偶然に發句出來得るといふ可能性を持ちながらも（ある八才ぐらひの女の子が「裸の子腹を叩いて逃げりけり」といふ句を作つたところ、高濱虚子がこれを非常に絶賞したといふことである）ことひとたびこの藝術の價值規準推測、鑑賞などといふ際に當面すると、いはゆる門外漢は全くなすところを知らず、野中に立たされた稚兒のこどく荒蕪としてゐるのである。これは確信してもよいことなのである。古來日本獨特の藝術として日本人のみが知り得た俳句といふものが、日本人の間に於てもかくの如き状態なのである。まして西歐に持ち込まれた俳句の藝術としての位置を思ふとき、私は眩暈を感ずることを疑はない。

北大の 植物園の 大瀧

この句は俳句雜誌「阿寒」（松本たかし）の巻頭に掲句されたものであるが、なんとしても、この句が巻頭に出されるほどの秀句であるとは、私は勿論世人もおそらくは思ふまい。吾々が書く文章の中のほんの一節を掴まんがために俳人はおそらく、しかあつたらしい顔をして苦吟するものであらう——十七字をもつて藝術を創り出さうとする俳句の特異性から、高濱虚子の上げた句の全部が全部、松本たかしの作り上げた句のすべてがすべて大家の、權威を失墜せぬ程度水準以上の句である

とは、必然的に絶對言ひ得ない。ここに俳句の一句だけでは、その作者の優劣がわかりにくく、一流大家と素人との區別がつかない」といふ特異の弱体が見出されるのである。だから「藝術的價值判斷をする前に、現代俳句はまづ署名を見て、それから作品を鑑賞するより道がない」といふことになるのである。だが

北大の植物園の大鑑

これは一体どうしたといふのであらう。この作表はむろん虚子、たかし、風生のごとき大家でもなければ、またその道に精神してゐる人とも思はれない。圖らずも氣易く投句したものが、權威者の選句によつて巻頭に出されたといふ繼にすぎない。

一体この句の中に何があるといふのであらう。私は藝術としての要素の貧困を思はずにはゐられなくなるのである。

秋櫻子が言ふやうに、何の苦勞もせずして、苦勞をしてゐる他人に忠告がましい顔をして物を言ふことはないなどとお叱りをうけるかも知れないが、俳句精神といふものならいざ知らず、吾々の良心的な藝術への批評精神はこれを等閑視することは出来ないのである。

北大の植物園の大鑑

吾々俳句の門外漢は所詮この句の藝術的價值は解せぬものなのであらうか。しかしたとへこの句が、いはゆる俳人のみが知り得る藝術的な香りの高い句であつたにしろ（そのやうな句とは絶對思へぬが）桑原武夫（第二藝

術——世界十一月號）の言ふやうに「作品を通じて作者の經驗が鑑賞者のうちに再生産されるといふのでなければ藝術の意味はない」といふことは確かな見方に違ひないのである。そして「現代俳句の藝術としてのかうした弱點をはつきり示す事實は、現代俳人の作品の鑑賞あるひは解釋といふやうな文章や書物が、俳人が自己の句を説明したものをも含めて、はなはだ多く存在するといふ現象である。風俗や語法を異にする古い時代の作品についてなら、かういふ手引きの必要も考へられぬことはないが、同じ時代に生きる同國人に對してかういふものが必要とされるといふことは、そして詩のバリエーションといふ最も非藝術的な手段が取られてゐるといふことは、よほど奇妙なことといはねばなるまい。藝術品としての未完結性、すなはち脆弱性を示すといふ以外に説明がつかない。」

私は、俳句が、黨派的な根性を捨て、といふことにもなつてしまふのである。娛樂趣味的な嗜好的玩弄癖を捨て、眞に俳句藝術にのみ全身全靈生涯をかけ（俳人の多くは趣味から發してゐる。俳人の多くは醫者であり、軍人であり、官吏であり、僧侶であるといふ事實）隱遁的封建性を打破し、批評精神を旺盛にし（俳句界に於ては批評といふことを全く好まず、あれこれと批判する人を極度に敬遠する。したがつて今のところ文學界に於けるがとき、叩かれクサされ、しかして鍊磨銀鍊するといふ苦しみは味はず、單に作句の多い者が、饒のほりにエ

ライ者になつてしまふといふこと）而して根本的に俳句の藝術的要素を究明しない限り、俳句の近代的藝術としての生命は保たれやう筈がないと思ふのである。

私はしばしば句會に出席して、よく俳人同志のいはゆる貧困な批評雜談を聞くことがある。彼等はよく人の句を指して「この句はよく情景を掴んでゐる」といふ言葉を聞く。單に情景をうまくあらはしてゐるからよい句であるといふ意味なのであらうか、近代俳句が人事句を嫌ひ（殊にホトトギス系統はこの傾向がひどい）單に肉迫のない小手先の技巧にのみ腐心し、思想的裏づけの無い莢リアリズム敘景句のマンネリズムに陥つたことの證左として、この俳句同志の光澤のない批評常套語は意味深く考へさせられる。ほんとうの寫實精神とはこんなものではないであらう。

作品を魅力づけるべく、主題の把握後に於ける「技巧」といふ創作上の手段なるほど小説にしても詩にしても、短歌にしても、創作上の手段としての「技巧」を過小視することは出来ないであらう。そうして思想の上に樹立された而も裏づけされた技巧こそが作品をより作品たらしむべく昇華してゆくものなのである。

門外漢の私も、しばしば友人と連立つて句會に出席することがあるのだが、かつてある句會の席上で、

茶の師匠花の師匠や雛の宴

子は子のころこ種ひいて春の雪

といふこの二つの句がひじょうに問題にされて、あれ

やこれや論議されたことがあつた。前句は阿寒（松本たかし主筆）の同人某君の作で、ほとんど高點で俳人同志から選出されたのである。後句は紙間屋の店員某君（石楠派の系統をひいてゐて、やはり相當に俳句に親しんでゐるらしい人）の作で、この方は只の一人も点を入れず入れた者といへば門外漢である私と友人の二人であつたのである。随分そのほかに高點で選出された句があつたが、期せずして私達は、この句を第一等に推してしまつたのである。

茶の師匠花の師匠や雛の宴

この句にはなるほどよいところがあるのであらう。私達とてこの句の持つ「巧さ」がわからぬではない。しかし私の評から言はせると、單に句作に馴れた「巧さ」であつて、ばつと純粋で興味はひくが所詮複寫された繪畫のやうなもので、作者の頭の中で、でつちあげられた單なる敘景に過ぎないから、それほどまでに評價に足る作品ではないのであつた。しかし私達の疑惑はこの句の良い悪いは別として、後句の

子は子のころこ種ひいて春の雪

がどうして前句と同等くらいの評價で選出されなかつたかといふことにあつたのである。私は俳句のエスプリを疑はずにはゐられなくなるのである。「俳人のみが知る」といふ俳界に於ける特異な鐵鎖に、喰ひ入ることのできなかつたこの句の普遍的な藝術性が惜しまれてならなかつたのである。友人はこの句を評して「此句なら小

説の一篇ぐらひ書けさうな氣がする」と言つた。さういつた深みのある主題をこの句は持つてゐるといふ意味なのである。

眞實は既に現はれてゐるありのままの人間を描くことではなくて、常に満たされぬ思ひに責められて而して求められ作り出されるものでなければならぬ。「ありのままを描寫することは、幼稚や無知に基く上への偽りを取り除いて、その底の眞を擇び出す効がある。これはたしかに眞である。根のない空想や、はかない期待とは異なるものである。しかし眞實の一半に過ぎない。まだなくて求めて求められるものが眞實である。それを描かうとするなら、どこにもあるやうな、然し眞はどこにもない人物や事件を描くのである。それを見る者はそれをどこかに現にあることのやうに思ひ、今の自分に満足して自ら慰めることができない代りに、自分の内に眠る理想を揺りさすして憧憬と希望とに我と我が身を焦くのである小説が促す模倣とはこのやうなものでなければならぬのである。」

俳人は虚構といふものを嫌ふのであらうか。そしてその手段から得る背後の眞實といふものを知らうとはしないのであらうか。而してここに述べられた藝術への希求虚構と眞實といふ藝術の絶對的定義を知らうとはしないのであらうか。トオマス・マンは絶へず次のやうな小説論を繰りかへし叫んでゐる、と誰かが告げた「文學に於ていつかかういふことがあつたといふ過去のいつかは

すでに、いつかかういふことがあるといふ大きな未來を指してゐなければならぬ。文學の過去は單なる歴史の過去ではない、過去が現在に生き、とほい未來につながるものが、文學の過去時稱である」と。

小説が文學、文學が藝術、而して俳句が文學、俳句が藝術であらねばならぬと希求する俳人の存續する限りに於て、早晩句の革命は當然起らなければならぬ運命にあるのである。

俳句藝術性の問題をめぐつて、近頃世界文學の作家達が猛烈に攻撃非難の烽火をあげてゐるが、同じ如の短歌も、「八雲」あたりで中野好夫氏や臼井吉見氏などから論駁されてゐることである。勿論これらの論議はいまの詩の領域に於ても同じく痛切に感じられることであらう。私もへたくそながら詩に似たものを書いてゐる關係から、ひどくびくびくものである。だが私がここで、先輩諸士の俳句論にいい氣になつて調子をあはせ、やれこれと雀の囀りのやうに喋つてゐるのは、俳句藝術そのものの根本的な要素に不審を抱いてゐるからのことであつて、「それでは現今の詩のさまじさどうか」などと嘆息をさらされては實際たまたまのものではないのである。だが詩には今は混迷してゐるが未來は展かれてゐるといふ希望があり、いつかは、そして度々は眞の藝術あるひは文學として認められてゐるほんとうの詩の線に歸ることがあるのだから安心である。ところが俳句に於てはその藝術が持つ要素が既に脆弱貧困で、ほんとうの藝術として

の故郷を持つてゐないやうな氣がするのである。さういふ状態にあるにもかかはらず、俳人がそのことを究明しようともせず、無氣力、批評きらひ、隠遁、趣味、かういつたものを寄せ集めて仲間ばかりで通するやうな、みんなのわからない十七字を作り上げて、とくとくと藝術家づらをしてゐるから氣に喰はないのである。

室生犀星がかつて「詩作をする上に句を作つてゐたので大いに役立つ」といつたことがあるが、俳人は詩を作る上の道具につかはれたこの言葉を聞いて大いに悲しかつたことであらう。しかし私とて俳句が地球上に存在する意義はどうしてこんなものではないからと固く信じてゐる。日本の詩人の多くは詩作のかたはら句作をやつてゐる。犀星とて今だにありがたく日々句作を怠りはしないであらう。白秋もやつた、朔太郎もやつた。そして達治もやつてゐることであらう。俳人が大いなる視野と意慾を以つて、俳句への残酷なまでの究明を怠つてゐる限り早晩藝術の一線から退歩しなければならぬだらうと思ふのである。

私は「同じ詩人にしても、妻子を捨てて放浪の旅に出た芭蕉よりも、一族一統をひきつれ悠々流浪をつづけた杜甫の方が親しみやすく尊い」と感懷を洩らした吉川幸次郎氏のこの言葉を、いま興味深く思つてみたりしてゐる。

繪になる詩

(1)

澁澤均

夕暮れに 硝子戸がしまる

くろい闇を 音もなく しめきつて

灰青く 戸外の風に 嶋つてゐる

ほつかり やがて

二枚の硝子に 灯がこもる

灯が…… 東京の焼あこに またひとつ……

孤獨とにくしみの灯も消えた

とおいビルの窓を見上げて

つゝましく ほつかり

また ひとつ……

兒童歌劇

春

額賀誠志

静かな序曲が流れて——
開幕 合唱に合せて踊る少女達

春風

春がきたよと

春風が

垂れ柳にささやいた

池の田螺は

眠を覺し

春だ 春だと戸を開けた

春がきたよと

春風が

木ごと木ごとにささやいた

風のうわさに

裏山の

みの虫さんはみの説いた

(草川信作曲)

踊る少女達下手へ下る、上手より花子、春快活に出てくる。花子手を大きく、輪をまがいて——。

花子「遠い遠い南の國から春がきました」それをうけて

春子「野も山もみんなきれいに化粧をしました。ね花

子さん小鳥はたのしい歌をうたつてゐるし……郵便屋さんの春風があつちの木にもこつちの草にも

お花の手紙を大急ぎで配達してゐるわよ」

花子かがむやうに、目を細めて下を見る。

花子「ほんとにね——ごらんない、土筆の繪描きさ

んが筆の花をもつてあそこをばつてゐるから……」

春子も下を向いてゐたが、下の土筆を一本とつて、大きく繪を描くやうにして——

春子「土筆の繪描きさんはつんつんのびてる筆の花で夜になると大空をカンバスにしてお月さんやきれいな

星を描くのぢやないか知ら——」

花子「そうかも知れないわ、そつと行つてみませう」上手に入る。下手より——。

踊舞の少女達が出てくる。

筆の花

つんつん土筆は 筆の花

いついつ描いた 青空に

ほんのり白い お月さま

あれあれ蝶々が 今日もきて

花にとまつて ひそひそと

なにを描くのときいてゐる

つんつん土筆は 筆の花

夕べになれば 青空に
きれいな星を 描くでしょう

(草川信作曲)

入れかへに春子 花子現れる

春子「ほんとに土筆の繪描きさんは皆んなそろつてつ

んつんすましてゐるわね」

花子「でも蝶々さんにはほんとうのことを話すらし

いわ。それからね昨日土筆さんのゐる前の小川を

通つて大川へお嫁入りする目高さんの行列を見た

のよ。それはそれはきれいだつたわ」

春子「そうそう、そう言ひば今日はとつても大金持ちの

田螺さんが金藏しよつて下の方の田にむこ入りす

るんだつて——」

花子「あらそう、面白いわね。これから田螺さんのむこ

入りを見に行きませう」

春子「さあ参りませう」その後を追つて田螺を踊る少女達が舞臺に現はれる。

田螺

たんたん田螺が

むこさんに参る

金藏しよつて のつたりこ

のつたり のつたり

ころりと下の田にまへる

ぼかぼか お日和

水田は温るむ

お供の田螺はこつくりこ

こつくりこ

ころりと 居眠りござる

たんたん田螺が

婿さんに参る

春の日本を のつたりこ

のつたり のつたり

ころりと 藏しよつてまへる

(草川信作曲)

静かに幕——

浪漫派詩人、

山川弘至の遺稿詩歌集

やまかは

(價、四十圓)

東京都杉並區西田町一ノ七〇七

白藤書社

『しらゆきに歌ふ』

小池 吉昌

しらゆきよ しらゆきよ
いつこより降りくるや
このくにのやまが嶺に
しろさはな 落ちくるよ
あはれゆき 霏々と降る
そのゆきの風に乗り
そのゆきの吹きあれて
おともなく ふるさに
わが庵の わら屋根に
おともなく降りつもる
ささらぎのしらゆきは
あはれあの やまを越え
このちさき ふるさに
吹きあるるしらゆきよ
わがいだく詩のゆめを
かざりなく 汝がゆきに

海上の鴉 保永貞夫

あゝその鴉はどこから来たか
岬も見えぬ暗い海峡の日ぐれがた
ただよひ流れる一本の獨木舟の上で
ぼろ／＼の聲韻句をくりかへす
おろかな鴉！
この季節には、小さな連絡船も通はない
あなたとの距離はますます遠くなるばかり
泡立つ波に溺みつかれて眠られず
智慧はかなしく餓えるばかり
もう童話も、信仰も、純潔も消えた
言葉につくし難い懷疑と忍従の世界があるばかり
わたしの生涯に通づる海峡の、このいたましい秋の終
り
どぼ／＼とはてなくめぐる獨木舟
霧がふる……重たい、重たい霧がふるなか
あゝその鴉はどこへ行くか

★ 言論の注射 プロテスタント

【和歌滅亡論】

このごろしきりに左翼陣營の連中が、さかんに和歌を三流藝術だとか、滅亡をするなどいつて元氣のいいところを示してゐるが、一体彼等の言論の何處に眞實性なり批判精神があるのか、吾輩にはさっぱりわからん。大体藝術を規定してかゝるといふことが不思議である。私小説をけなししてみたり、文學を政治の道具に利用したり、そんな連中が藝術の徒であつたら、誰も苦勞をせやせんよ。人間の苦惱や、高貴な精神を、ただ階級闘争的破壊思想で云々するものは、眞の人間性を理解してない者に相違ないのである。

左翼の連中は、何でもレッテルをはりたがるが、彼等の狂的な尺度で、藝術が左右されてたまるものではない。和歌が滅亡することは、日本民族の、それこそ、彼等が常に利用する、大衆の切實な苦惱や、よろこびを、もつとも手早く表現する、唯一つの民衆藝術を奪取することになるのである。

左翼文壇のおつさん連中よ、和歌の滅亡を叫ぶ前に、自分達が滅亡せんやうに氣をつけ給い。（青い帽子）

【自由戀愛結婚】

戀愛をきたないものだとか考へるお方は、眞の戀愛の本質

を知らないお方です。戀愛を無理にしやうなどと考へるからとんでもないことになるのです。戀愛とは、自然にもつとも自然に成立される、人格と人格のむすびつきです。人間の魂と魂の握手です。金錢をもつて買はれたり親や世間に規定されたり、精神の高度な念願によつて結ばれず、ただ肉慾的に結ばれたり、また、結婚を前提としての戀愛観より成立した戀愛は、假裝戀愛だと思ひます。眞の自由戀愛結婚は、無拘束な眞の愛より生ずるもので、他から絶対に強制されたり、束縛されず自己の内から發した自制的な道德を基盤にして、個の人格的責任をもつてなされべきものです。ただし、これを實現させるには、勇氣と大いなる決意を必要とします。

（愛の天使）

【親の愛】

親の愛を充分に批判すべきである。盲目的な愛や、功利的な愛に、私共子供は今まですいぶん苦しめられて來たのである。これは日本ばかりではない、古代「フィニシヤ」の社會政策に利用された不幸な男女青年にも見ることが出来るし、希臘、殊にアテン人に於ける女子の結婚は誠に哀れなものがあつたのである。

▽日本の封建性を打破する道は、先づ結婚の正しい在り方から發足すべきである。政界結婚は唯物思想の現れであつて、日本に於ける親の愛なるものは、多分に、この唯物觀に根ざしてゐるのである。日本青年男女は正しい自由のもとに、人間の魂を回復せしめ、すみや

かに愛の行進を開始すべきである。

▽親に正しい反省をうながすことは不幸にならない。勇氣を出して、眞面目に親を説くべきである。安易な善行とは、親の義理に（もつとも効利的な）せめられてかたんなる犠牲精神を發揮することである。しつかりやつて下さい。（或る男）

【世相】

▽「何がなんでもやりぬくぞ」といつた時代があつたが「何がなんでもやらないぞ」といつた時代が今である——これは逆説ですが、こういう逆説をいへるのが矢張り今の世の中、全く近頃の世人は何にもやらない。剛引なまでに何にもしてないし、しやうとしない。やつてゐるのは闇商賣だけだ。人のため身のためになることは厭だが、闇夜でやらうといふのでは世の中が明るくなるまい。（愛國生）

▽夜が明けて朝日が出た。九時半だか十時だか日本一の時代だか、やがて天高く一番陽の高いときが明治の御代ださうだ、それ以後は陽が低くなつて夕方が満洲事變。成程聞いて見れば今の世が闇夜ださうだ。そのうち星が出て来て所謂明るい世の徴候が見えろと、ある田舎爺がいつてゐたが、それなら再び陽の高い低い時代があらうといふもの、こゝまでくれば軍國的な物の考へ方でもあり、輪廻を説く佛敎家のやうでもあり、或ひは民主主義者のやうにも見受けられるが、はてさて、こうしたものいひはどうであらうか

ものの考へ方、いひ方も更へねばなるまい。

（言論クラブ生）

【文學研究】

▽人間の生活はいかにその心理に於いて變貌し發展してゐるか、而してこの事實と將來に對する見透しのつかない作家がまたまだ昔の心理でものを書いてゐるが、これはいつたいどうしたとか——人間の心理なんて變らないとでも仰言るのですか。ぢや世の中も變つたなどとはおくびにも出してはなりません。

（心理家）

▽この頃「スタイル」といふ文字をよく雑誌などで見受けるが、これは女の子の服装ばかりでなく文學でもスタイルといふことが新しく叫ばれてゐる。まさに世はスタイル狂の時代ですね。ところでスタイルとは自己をいかに表現するかといふ問題を含むもので、自己を忘れたモードなどは規製品の服を着るやうなものなんです、全く自己を生かさうと思へば、モードを破りますからね。（洋服教師）

【男女同權】

▽男女同權もいゝが、私はこれを一部の男子の側から申上げます。男を隷屬させやうとする有閑の御婦人よ。あなた達が私をこんなにしたのです。有閑が男に何を強ひるかといへば御世辭と偽りの愛の遊戯と豪華な贈呈品です。厭だ、この世に御世辭と偽りの愛の遊戯と豪華な贈呈といふ習慣がまだ残つてゐるのは、あな

た迷のためです。私はこのために家産を傾けました。

私は心弱いもので、これらの罹災者の一人なんです。私は世の心弱い男子を代表して、こうした隷屬と罹災から男子の男女同權を主張するのです。素裸でもあなただ方の虚飾と席を同じうできるやうにです。皮肉ぢやありませんよ。（心の罹災者）

【喰つて見たら毒であつた】

▽喰はず嫌いはいかんといふので、一生懸命喰つたら腹を痛め、胃を痛め、おかけてクスリヤ代がかゝつて困つた。儲かつたのはクスリヤさんです。

▽民主主義の敵が何であるか、労働者の眞のサクシユヤは何であるか、次第に判然としてくる。反動と呼ばれ御用組合と呼ばれても、正しい道のために起上つた多くの組合員に拍手をします。こゝらあたりから、人間性を認識した眞の組合運動が誕生するにちがひない。▽日本のマルキリストは二年たらずで、マルクスやレーニンの理論を腹中におさめたといふのですから偉いものです。これで腹を痛めんのが不思議です。（同情居士）

【二流作家】

或る文科の學生さんが、僕を東京では二流作家だとけなしてくれたさうです。然し、僕はけなされたと思はないのです。僕を心配してくればこそその批判であり、僕自身反省して成程と思ふからです。

しかも、僕は三流作家にすぎないのに、同情をして二流

だと云つてくれたのですから、心から感謝します。だたお願いすることは、僕の悪さを今度から面と向つて云つて欲しいのです。そしたらどんなに救はれるかしれません。學生さんよ。どうぞこの小さな存在である三文作家を御指導願ひます。（キヨシ）

【郷土人を愛せ】

郷土を愛する人々は、郷土が生んだ藝術家に祝福を送るべきである。

みんなで後援して、その人を立派にさせることはたのしみである。幸に美術方面では柴田善登氏、柴田佐千雄氏若松光一郎氏が活躍してゐられる。郷土の名譽ともいふべきことである。これ等の人達をまちがつても小乗的眼鏡で見えてはいけない。善い人をしつとしてはいけません（キヨシ）

『文祭』第三號

原稿募集

小説、戯曲（二十枚迄）
詩、歌（十首迄）
切……六月卅日

（第三號は創作特輯號です。新人の登場を期待します。原稿の返却はいたしません。送附先——福島縣湯本町表町二〇六 河内 潔 士

鼠

菅田 甫

大工をいれて、臺所のこわれた窓をなほさう／＼と思つてゐるうちに、とう／＼盗ぼうにはいられてしまつた。さもあることをおそれて、私はいく度大工の家々をまわつて嘆願して歩いたがしれなかつた。そのたびにことはられて歸る。業腹は、私には耐えがたいほどだつた。私のやうに文學上のことばかりで暮らしてきた男には、所謂顔などのきかひはすもなく、有力なつてでもないがぎり全く望み薄だつた。當世の大工は何かといへば、すぐブレミヤとか鑿應のことなどをいつて、昔のやうにサービスなど業にしたくもなかつた。そして仕事をすることを思着せがましく考へてゐる。さういつた点が、妙に感情的にこつちへぶつつかつてくる。頭を下げて頼みこむと彼らは大臣にでもなつた氣でゐた。こう窓のために人情もないまでになをさまりかへつてゐるのを見ると、『善き世も来だし』といふ感じが深かつた。今度の盗ぼうにだつてこれがいいへた。

その日は、俗に大工とかさ氣のないものはないといふが、私はいさゝか業腹が手傳つて、臺所の窓の修理を自分一人でやつてのけるくらゐのもりで家へ歸つたものだつた。私は常日頃、家人の一人としてない無用心さから家を空けるときは、戸口といふ戸口にはすべて錠をかけてでることにしてゐる。ところで不安なのはこの十年

衣類を盗られて、大工に對する私の考へも大分變つてきた。私は大工を一種の藝術家とさへ尊敬してゐた。一枚一枚板を削つてひたすら、『完成』を目ざしてゐるからである。そこには報酬とか功利とかを考へる氣持がなく、ただ『完成』のよろこびを味ふための『完成』をすべてとした仕事だけがあつたからである。しかし私の家の臺所の窓はこうした仕事とは類を異にするものやうだ。私はすつかり大工を断念すると自分で窓の修理をやる決心をした。といつても無論、満足な仕事などできやうはずもなかつた。多分に怨恨を含んでできた御手製の窓は一たび風雨にあうや雨戸のためつけが悪いせいか、雨水が吹きこんできて、臺所中洪水騒ぎだつた。第一板戸のために明りをとれないで困つた。したがつて常に薄暗くじめ／＼してゐて、まことに鼠の温床にはもつてこいだつた。鼠といへば家裏が戦争で焼けてからはめつきりその数を増し、この頃は自由に臺所に跋扈し始めてゐる。これには私は弱りめに祟りめで、一日中、鼠の群を追ひかけまわさなければならぬ有様だつた。ところが最近鼠公達私の顔を見てもしらつばくれて泰然と行動し、私が思ひあまつて猫いらす一服盛つても、まるきり小馬鹿にして寄りつけない。かへつてその夜は私を嘲笑ふかのやうに天井裏で亂舞騒ぎをやらかす。私は睡眠の時間さへ充分に持つことがでなくなつた。これにはすつかり私もからだを消耗し、何とか今のうちに對策を立てなければならなかつた。私は種々と考へた揚句、例によつ

間にすつかりいたみつくした臺所の窓で、日中は土地賣買のブローカーが人を連れてきたり、近所の子供達が家の中を覗いていつたり、夜ともなれば何處へ、捨てるともあてのないブタを家裏の隅隅へ捨てにくる人達のためにいゝ鑑賞物になつてゐることだ。こうした鑑賞はあまりいい結果をもたらさない、といふのはあとでわかつたことだ。窓の破損をそのまゝにも放つておけないので、急場の間にあはせるため、私は手ごろな杉板をぶつつけておいたが、それも永久的になりさうだつた。だから外から歸るといふ早く私は窓の異常をたしかめた。ところがこの日にかぎつて窓の杉板が引はがされてゐて、臺所の中がすつかり土足に踏み荒されてゐるのが外からまる見えなのだ。私はしまつたと思つたが何も彼もあとの祭り、臺所の錠をあけるや否や私は血相を變つて家の中へはいつていつた。犯行の跡は臺所から座敷へあがつてゐる。簞笥の中からはすつかり衣類が引出されて、ボロ着物ばかりが土足のじり／＼にあひ、火鉢の灰かぐらの跡がある。私は呆然として精神を喪失し、どうにも收拾のつかない氣持だつた。しかし時経るにしたがひ喰へなければ米だけ盗つていけばいいぢやないかといふ盗人への憤懣をおぼえてきた。災難が米だけですませれば、どうせ大工のために蓄へたものだけに、ざまを見ろといふ氣持もあつた。が何はともあれ、今にしてはかへすやうなものない。何とまあ、今の世は穴だらけのこわれ放題、ものを掠めるにはまことに都合よくできてゐるものだ。

て臺所の下へもぐりこみ、彼らの屯するあたりとおぼしきところに、強力なバネ仕掛の鼠取器をそつとしのばせるよりほかにはなかつた。すると數刻を出ずして、その罪劫にふさはしい最期をかざるものが續々とできた。皆強力なバネによつて、先をくだかれ流血がおびただしかつた。それでも鼠の群はいつこゝろに減りさうにもなかつた。それどころか鼠におびやかされて不眠症になつてしまつた私は、鼠の走る姿が始終眼の先にちらつき、ときどき映畫の大寫しのやうにうらめしさを訴へてこられるのは困つた。やがて彼らは共同戦線をなつてきた。彼らは同時に行動をして、あるものが茶簞笥の中へ入ると他のものは臺所を走りやうする。と思ふとどこかの隅でばり／＼と齒音を立てゝゐる。私一人ではいくら手があつても足りなかつた。この頃の鼠は人間界ではもはや喰ひつめ、當然ちたばたせざるを得ないのだらうが、こう反抗のための反抗を繰り返してゐるところは、並々ならぬ智慧と殘虐性があつたと同時に人間の價値もすつかり下落したといふべきか。彼らは物音一つたてず流し場の下あたりに身をひそめてゐたかと思ふと、時々小するさうな顔を覗かせ、人間様の私をからかつてゐるところはなかなかユーモラスがあり、私をつい失笑させる。しかし、その瞬間には私の足許を襲つてゐた。あッーと叫ぶ隙もなかつた。たちどころに私の足には血が浮き、その血の跡を点々と墨へ残して、悠々と引き上げていく度胸は見上げたものだつた。

人間の馬鹿 (二)

—或狂人にされし男の日記より—

青柳生兒

こうなると鼠を盗ぼうの標本のやうにいふのは當を得ない話で、まさに執念の鬼とでもいふべきではなからうか。兎に角、この頃は居ても立つても居心地の悪いことは甚だしかつた。鼠が終日、無気味な齒音を立てて喰ひあかした穴は私の氣分を損ひ、私はとうとう我慢がならず一々その穴をトタン板で塞いだ。一番流し場の眼に立つやつへはトタン板を張つた上へ配給メモの黒板を作つてかけ置いた。これは穴塞ぎとしては成程いい思ひつきで便利なものだつた。そして黒板へ「月 日米の

配給。日、魚——一くわつ配給」などと白墨でメモをとつていくのだが、薄暗い寮所の中で如實にその白さが訴へてきて、何かこう深淵に光るものがある思ひだつた。私の心はしだいに落着いてきて鼠の穴を塞いで、黒板が主張するところの白色の意義を考へるともなく考へるのだつた。

その晩は、久しぶりに私はぐすり眠ることができた。今はしきりに去來多い世に、一片の白墨の表現をのみ思ひつづけて…… (完)

俺が土蔵から出されると、妹が一番やさしく慰めてくれた。親爺や長男は非常に警戒してゐるらしく、おふくろは何かと俺の氣嫌をとり、やぶ夫妻が時折俺の心理状態をたしかめに来た。

次男は仲に入つて、俺に殊勝な顔で説教した、「お前も廿六ぢやないか。すこし考へを大人にせんといかん。世間と平行しない考へはいかん。」俺はそれに答へる代りに、次男を反對に責めてやつた。

の虫封じを盲目の行者さんといふ人のところへつれて行つて頼んだ事がある。それ以來、俺が何かの事で怒つたりすると、おふくろはきまつて、大三郎はかん虫が起きたといふやうになつたのである。

俺はかん虫の事を云はれると、いつもきまつてどういふものか怒れなくなる。自分でも可笑しくらひ腹の力がぬけてげつそりしてしまふのであつた。

妹の事件があつてからの俺は、暫く長男とも親爺とも口をきかなかつた。妹の祝言の時も、みんなが目出度い／＼なぞと云つてゐるのを聞くと、無性に腹がたつて、しまひには泣いてしまつた。

妹の嫁入道具は仲々豪華なものであつたが、妹の心中は淋しいものに違ひないと考へ、結婚式にも参列しなかつた。親爺は俺が出席しないのを世間態が悪いなぞといつてゐたが、なかに、實はほつと安堵の胸をなで下してゐたらしいのである。

俺は俺の一家の痛であつたらしい。

「大三郎の血は確に異質のものですよ。子供の時から變でしたからね。」

注射が好きで、患者を三人も殺したといふ蘇醫者の女房になつた長女きりぎりすのこれは批評である。長女が俺を子供の時から變だといつたのには、確に論證づける原因はあつた。その二つ三つの例をひくと、俺は良家の御子息に似合はず勉強が嫌ひで、労働者の子供達とばかり遊び、家の寮所から果物なぞを持ち出しては

布施太子のやうに施しを好んでやつた。

喧嘩の相手はいつも有名入種の子供達ばかりであつた。俺はそいつらが、貧乏な家の子供達をさげすんでゐるのを知つて子供心にも正義心をもやしてゐたらしいのである。

ある時、ふとした事から俺は喧嘩の相手になつた町長の息子の頭に、獨樂の心棒で穴をあけてやつた事がある。その爲に俺はおふくろに尻を二十回もぶんなぐられた。町長の息子の頭には今でも五錢玉位のヘコハゲがあるのはその時の名残りである。

これはまだいゝ方で、小学校五年の時に、俺は自分の通信簿が、不當にも虚偽で飾られてゐるのを發見して、先生に喰つてかゝつた事がある。罪は俺の家のおふくろにあるのであるが、俺はどんなに懲服で見たところで、落第にならぬのが不思議なくらい成績が悪かつたのである。それなのにいつの間にか丙が乙になり、乙が甲になつて優秀な成績を示してゐる。俺はかん／＼になつて怒り、先生をインテキ師だと罵つた。

俺は今でもさうだが、何事でもわからないくせにわかつたやうな顔をしたり、わかつてゐながらわからないやうな態度をとることをとても嫌つてゐた。それと話は違ふが、ある時、親爺に生物を哀れめといふ話を聞かされた事がある。俺はその話を聞いて五分もたない内に、親爺が大切に飼つてゐた九官鳥を籠から出して逃がしてやつた。一つの善行と考へてゐたのである。

俺が九官鳥を自由にさせてやったら、九官鳥は喜んで天に飛び去つたと親爺に告げると、親爺の顔色が逃がしてやつた七面鳥のやうに赤くなり、青くなり、やがて俺はひどく叱責されて、土蔵に罰として一時間監居を命ぜられた。俺が土蔵の味を知つたのはこの時からである。俺はそれでも平気で、つき／＼と親爺やおふくろや兄貴達の困る事をやつてのけた、世間の風評も俺が變り者だといふ事に一致してゐたやうである。

さて、長女が俺を評して異質の人間だといった言葉の意味がやゝ判明してきたやうである。

では、いつ頃から俺はキ印として病院に厄介になつたかといふと、妹が鰥口と結婚してから一年ばかりたち、長男の女房が猿のやうな顔をした女の赤ン坊を生んで三ヶ月ばかり過ぎた頃からである。

最大の原因は、俺が親爺の選挙演説を邪魔したといふ事と、神社の祭りに素人芝居の脚本を書き、自分もそれに出演して、俺の町では御法度になつてゐる戀愛結婚を奨励して、若い者達の感情を刺激したといふ事にあるのである。

後者の場合は、俺の町の社會道徳といふ小さな箱の中に人間を押込んでとく／＼としてゐるが、亡者の連中が、俺を危険人物と見たゞけであるが、前者の選挙演説妨害は、俺の家の名譽問題であり、親爺の關係してゐる日本○○黨の信用にもかゝるといふので大變な騒ぎになつてしまつた。

射なぞされてはたまらぬと思ひ座敷を出やうとすると。

「そら、逃がすな。」

「いゝから柱へしぱりつける。」

「足を押へろ。嚙りつかれぬやうに用心しろ。氣狂ひに嚙まれたら毒が廻るぞ。」

「よし、もう大丈夫だ。」

ひどい事をするものである。みんなでもつてたかつて俺を座敷の柱にしばりつけてしまつた。

おふくろと長女が青い顔をしてゐた。

「俺をどうしやうといふのだ。馬鹿にするな。」

「あゝ、よし／＼。すぐなほるからね。」

おふくろは俺を子守りでもするやうになだめてゐる。こんなむくれた話があつてたまるものではない。俺は親爺達が氣でも狂つたのではないかと思つた。しかし、親爺やおふくろや兄貴達は俺を狂人になつたのだと考へてゐる。第三者が見たら判斷に迷ふに違ひない。

俺はいさゞよく狂人共のなすがまゝにならうと覺悟して眼を閉じた。

「舌を出してごらん。」

長女と敷注がさういふかいわぬ間に、もう俺の舌や眼球をひつたつたり、ひつくり返したりして診察を開始した。まるで俺は地獄の青鬼や赤鬼にいちめつつけられてゐるやうなものである。

醫者といふ奴は、非常に殘虐性を持つてゐるものだ。俺はその時に痛感した次第である。

親爺や長男や長女夫妻の言によると、假にも自分の親の演説に反撥するといふのは常軌外であり、確に大三郎は精神に異常を來してゐるといふのである。

そればかりぢやない。俺がみんなから狂人と思はれるやうになつたのは、俺の人を喰つたやうな笑ひにあつたらしい。俺はみんながよつてたかつて深刻な顔をして協議してゐる時に笑はなければよかつたのだが、どうも可笑しくてしやうがなかつたので笑つてしまつた。何でも

ない事を大の男や女が頭をしぼつて考へ込んでゐる姿はこつけないものである。俺は大いに笑つてやつた。ところが親爺達は俺の笑ひを何か狂的なものと考へたらしいのである。

「脳味噌が破れてるんぢやないかねえ。」

「そんな事はないだらう。だが、狂ひつくあることは認めねばならぬ。」

「このまゝにして置くと危険ですよ。」

おふくろと親爺と長男は、困惑の表情よろしく考へてゐる。

俺は馬鹿／＼しくなつて墨の上に大の字に寝轉がる。

「診察をしてみます。」

「精神病もわかるのか。」

「或程度まではわかりますよ。」

「鎮靜劑を注射しやうかね。」

驚いたのは俺である。長女のきりぎりすと敷注の奴が長男と相談して俺を診察しやうといふのである。俺は注

「確に異常を來しますね。」

「うん、精神分裂症といふやつだ。」

敷注と長女は、俺をさん／＼こきしらべた結果、右のやうな斷定を下した。

「やつぱりさうだつたのか、可哀想に……。」

次男が電話でも呼び出されたのか俺の顔を氣の毒さうに見てゐた。

それから間もなくして長男達は、俺を又もや土蔵に叩きこむと、その夜の十時頃迄、二階の座敷で俺の身の處理について家族會議を開いてゐるやうであつた。

× × ×

その翌朝、敷注夫婦や長男に護衛されて俺は汽車に乗せられた。何處へ行くのかと思つてゐると、三時間程して下車させられ、五市の精神病院の門をくゞつた。

そこで俺は、この國の醫學に失望を感じてしまつた。醫者も醫者なら、信じる者も馬鹿である。俺は長男や長女の愛情をこの時ほど悲しんだ事はなつた。

俺を診察した醫をつけた何とかいふ博士は、敷注の先輩の兄ださうだが、俺を一眼見るなり患者あつかひにしたのである。

「大分進行してる。君、笑つてごらん。」

「無禮な事を云ふな、失敬な。」

俺は眞赤になつてゐた。

「ほゝ、狂暴性の徴候がみられる——
家ではどうでした？」

博士は落着いたもので、髭をひねくりながら長男に聞く。

「はあ、ちよく／＼發作を……。」

「さうでせう。いや、なかに、一、二年放つて置くとよくなりますよ。」

俺を犬か猫のやうに考へてゐるらしい。俺はその時どうしたものかふと狂人生活の方が面白くて、氣が楽なんぢやないか……と考へたのである。今更常人ぶつた滑稽をしても追つかぬと観念したからである。

「まあ、三年や四年だつたらこれの財産で療養は出来るわけだ。」

「勿体ないわね、無駄なお金を……。」

長男と長女の功利主義者奴。俺は肉身の冷酷さを身にしてみて感じたのである。貧乏人の方がもつと愛情がある俺は黙つて窓外を見てゐた……。

長男と長女は、俺が氣狂ひで何を云つてもわからぬのだと安心をしてゐたらしく。親爺が俺にくれるといつたすこしばかりの田地を、あわよくば摘取りしやうといふやうな事を話してゐた。

俺はそんな對話を聞いてゐるうちに、人間といふものゝあさましさを考へて泣いてしまつた。俺を狂人にしてしまつたのは、何かあさましい魂膽から……ではないかとさへ考へられて来た。道化人形——俺は人生を悲しみながら笑つて踊つてゐるピエロを自分にあてはめた。欲しいものはくれてやれ。こんな喜劇があるものかと思ふ

と、急に笑ひがこみあげて来た。長男も長女もみな驚いて俺をみた。博士はしたり顔に發作が起きたのだといつた。

俺が精神病院の客人になつてから一番先に見舞に來たのは妹である。妹は俺に同情してゐるらしく、いろ／＼と慰めの言葉などかけてくれたり、その後の家の様子など話したりしてくれた。

それによると、親爺やおふくろはさすがに俺の事を心配してゐるさうだ。無禮なのは長男や長女で、俺がもし通常の精神状態になつてもすぐ家に入れることは危険であると云つてゐるさうである。

どうも變な具合で説明のしやうがない。俺が普通の精神を回復するといふのはどういふ状態になつた時に認められるのか……？

現に妹が俺に早くよくなつて歸つて来てくれと云つてゐた。妹までがやはり俺をキ印と考へてゐるらしいのである。

町の噂はまだひどいものであつた。妹の言葉をそのまゝ御披露に及ぶと、先づ俺は、俺一家の秀れた血統を繼承して居らぬのに違ひない。大三郎さんは捨子であつたらしい。それを俺の親爺が情をかけて育てゝやつた。(大嘘である。尤もそれが本當なら、俺は俺の血を祝福する)。

次に、大三郎さんは、中學生の時に大沼の主である河童を殺した。そのたゞりで氣狂ひになつたのだ。(これ

も嘘である。いや嘘とまで否定出来ぬが、俺の殺したのは青蛙の親王である。第一俺は河童など見た事もない。俺の町では迷信家が多い。)

その次に、大三郎さんはある女と戀愛をしてゐたが、親爺さんがその女との間を許さなかつた爲、選挙演説の邪魔をしたり、亂暴を働いた。そしてあけく果に氣が狂つたのだ(これも出鱈目である。俺は戀愛に神を發しやうと考へてゐるが、未だに殘念な女を心から愛した事もない。愛された事もない。親爺の演説を反證したのは、親爺が便乗主義者であるからだ。)

その外、まだいろ／＼取沙汰されてゐるらしい。世間なんでもはおせつかいなものである事は知つてゐるが、よくもまあ、俺如き者をつかまへて神經を浪費してくれるのだと、俺は感謝にたえない。しかし、俺は、その世間といふ無理解な小姑の爲に、どんなに多くの良心的な人や、純情な人々が泣いてゐるかを知つてゐる。人貪しい者、弱い者が、世間の冷眼に抗しきれず、心にもない人生を送り、その人々の爲に起上つた正しい者の叫びが、小數なるが爲に異端視されて、いつの間にか葬られてしまふのを知つてゐる。

俺は妹の話を黙つて聞き、黙つて妹と別れた。余計な事をいふと妹が却て心配するのを俺は知つてゐたからだ。それから二、三日して、薄情な家族が一つの冒險をこゝろみるやうに俺を見舞にやつて来た。俺は妹の時と同じやうに無言で迎へ、無言で彼等と別れた。この時の無

言には、俺の経験が加算される事は云ふまでもない。俺は語らずして相手の心を歌ひあげる。偉大なるゲエテの自然感情——詩人的直觀を尊んでゐたのである。さて、俺の狂人日記を——病院は俺にとつて苦痛な場所ではなかつた。何是なれば、俺は生れて初めて自己の感情を自由に行使する事が出来るやうになつたからである。

俺の住む世界には、人間の裸像が生々と呼吸してゐる。そこには普通社會に於ける地位、名譽、財産を云々したり、人間の自由を束縛する制度や規律がない。未完ではあるが、俺は狂人の裸像こそ人間主義の新しい發想を見るのである。

精神病院——人はこゝにこそ、原始的人間感情の多彩な音楽を聞くに違ひない。

歌を歌つてゐる少女、蒼空を瞬きもしないでみつめてゐる女、壁に向つて靜座してゐる青年。空間の幻像と話してゐる人妻、わけのわからぬ事をわめきたてゝゐる四十男、子守歌を歌つてゐる若妻らしい女。さうかと思ふと政治を絶叫して泣いてゐる志士らしい男等……。

みながみな社會をいて経験した大きな苦悶や悲しみを思ひ出しては泣いたり笑つたりしてゐる。そして又新しい喜びをうたつてゐる。

俺は、はじめそのやうな風景に遭遇して、眞實の事をいふと、すくなく恐怖を感じたのである。俺は自分が狂人でない事をいやでも自覺しなければならなかつた

し、これからは、つとめて狂人らしくよそほひ、少しでも早く一人前のキ印になつて彼等の仲間入をしなければならぬと考へたのである。

だが俺は、さつきからいつてゐるやうに、日を経るに従つて、彼等こそ神の啓示によつて發見される美しい自然の子であり、一片の功利も必要としないで、俺と生活し得る人間である事を知つたのである。

無論、氣違ひの彼等である。常人が見たら愚かと思はれる事も平氣でやつてのけるが、しかし、彼等の間にも狂人の道徳といふものがあつて、正邪善惡を普通人と違つた感情で處理してゐる事を社會の奴等は知らぬにちがひない。

俺は彼等に自然に形成された人間道徳を見た。彼等は自己を一切の法則から自由であると感ずる人間の一群である。

俺は彼等を不幸であると考へてゐる世間の奴等に、彼等の幸福である事を告げたい。それと共に、俺をこのやうな世界に送りこんでくれた、俺の家の者に感謝したい。俺は病院の仲間がどんな生活をしてゐるとか、病舎で何棘で、看護婦が何人居て、牧師が聖書をどんな風に讀むなどといふ客觀的報告はしなかつた。

又、俺の生活狀態や、俺の親爺やおふくろ、そして藪注ときりぎりすと長男の馬鹿野郎が、その後見舞に來てどうしたなどといふ事にはふれなかつた。ふれてもいいが、あまりにも愚劣な事だと思ふからである。俺はこの二ヶ月のあひだに、俺の仲間と本當に親密に

なる事が出来たし、今更常人にかへらうとは考へてゐないのである。俺は、俺の理想とする世界がまだ、實現されないのを知つてゐる。だが俺は、俺の仲間達がこの病院で、俺の理想に近い生き方をしてゐる事を、充實はしてゐないが純粹な原型として發見したのである。俺は非常な喜びを覺えた。彼等はあるがまゝに生きてゐる。あるがまゝに人間を歌つてゐる。

俺は今一つの慾望を彼等に與へる事を考へてゐる。俺の仲間、彼等に微智と冒險を——純粹に現世的であり、而も唯物的でない、生の理想の形式が加味されたなら……と。

俺は俺らしく絶叫したい。絶叫する事が許されてい、と考へて主張する。

「——自分を一切の法則から自由であると感ずる人間はゐないか。自分の心中を探りさへすれば、そこに神が創造の六日間に創り出したものにも劣らない輝かしさを持つ内面的世界を發見する者にもゐないか。

——自身神であり、創造者であり、機械的客體としてでなく、却て有機的に生産する主體として、生きた衣裳として、否永遠なる神性の生ける肉體としての人間たらんとする者はゐないか……。」

俺は何を書いてきたかわからなくなつてしまつた。非常に興奮してゐる。長女や長男の云ふやうに、本當に氣違ひなのかもしれない。でなければ、おふくろのいふやうに、かん虫が起きたのかもしれない。もう喋る事も書く事もいやになつた。
(未完)

女房祭り

河内 潔 士

空は青空、陽はうらら、今日はわが家の女房祭である。僕は妻君の夢をやぶらぬやうに、そつと布団からぬけ出ると臺所に出てうがひ行事に身を清め、パン／＼と拍手をうつておてんとうさまに朝の挨拶をする。

「家内圓滿、身体強健、願望成就ならしめ給へ。」

その外いろ／＼と慈の深い祈願をして、(人間といふ奴はしかたのないものです)さて甲斐／＼しくコンロを出して火を起し、御飯を炊かうと思つたのである。

ところがこの頃のマッチは駄目ですな。どうも精力的に燃え上らないのです。木炭の質も悪ければ、おまけに焚木がしめつてをつてな／＼つかない。勢よく燃焼するのは僕の原稿用紙の屑ばかりである。

おかげでさんさん手間どつてしまひ、せつかくゆつくり寝かせて置いてやらうと思つた妻君を起してしまつた

「けむくつて息がつまりさうだね。」

これは事實である。家の中がもう／＼として煙幕をはつたやうになつてゐる。これでは穴の中の狸でも窒息してしまふ。

僕は妻君にわびを云つて、

「まあ、ひとつ散歩でもしてきたいいよ。朝の街を歩くと氣がせいせいする。」

「御飯大丈夫？ あんまり炭を使はないでね。」

妻君は心配さうな顔をして、コンロをのぞき、それから鏡に五分間向ひ下ら、昨夜注意した事をくれ／＼と氣をつけてやつて下さいと念を押して、御氣嫌うるわしく散歩にお出ましになつた。

僕は責任の重大さを痛感し、コンロの火加減を檢討して座敷の掃除にかゝつた。

さすがに妻君は、僕に悪いと思つたのか、布団はちゃんと押入にかたしてあつた。妻君といふものは(特に僕の)有難い存在である。僕は危く泣きさうになり……(ッです)手拭で鉢巻をし、マリネを口づさみながらはたきをかけ始めた。

はたきの音といふものはなかなかリズムカルなものである。あんまり調子に乗つて障子の紙を二ヶ所ほど破いてしまつたのは失敗であるが、とにかくは掃除は上々に終つた。

そこで僕は、妻君に隠してゐた光りを出して一服やり、それからおもむろに腰を上げて今度は馬穴に水を汲み、拭き掃除を開始したのである。僕は海軍につて、尻をひつぱたかれ乍ら、甲板掃除をやつた経験があるので、拭き掃除だけは得意である。

僕はすべて音楽的にやるのが趣味で、あつちもこつちも歌をうたひながら、眼のとどく限り、手のとどく限りみんなふきまくつてやつた。人形の顔までふいてやつた黒くなつたので、妻君の白粉をなすりつけてごまかしてしまつたが、三日後になつてこれはばれてしまつた。悪事はいつかばれますな。

御飯は吾ながらよく出来た。僕は獨身時代から御飯炊きだけは自信があつた。その爲に友人達四人と自炊した時は、いつも御飯を炊かされた。みんながうまいうまいといつて僕をほめたものである。今にして思へば、彼等のおだてにのつておさんどんをつとめてゐたのである。僕はすっかり氣をよくして汁鍋をコンロにかけると、かねて計畫してゐたけんちゃん汁を作りはじめた。

豆腐はちゃん大豆を豆腐やに頼んで特別作つてもらつて置いた。豆腐は誰なく料理出来るが、大根や人参をきざむといふことは技術を要する。

僕ははじめ寸法をはかつてきざんでゐたのであるが、しまひには面倒臭くなつて、めちやくちやにきざんで鍋にぶちこんだ。

大体料理などといふものは、見目はきたなくとも味がよければよいものなのである。

けんちゃん汁の用意をしてゐると妻君が御歸宅になつた。「何の御馳走？」

「びつくり箱だ。あとでわかる。」

僕は妻君を座敷に追つたらふと、早速、お茶を入れて

ちやんとわかる。夫婦間の暗號ですから。

妻君は赤字を非常に恐れてゐるのである。

「大丈夫、家庭平和はおびやかさんよ。」

僕は悠然として箸を手にする。妻君は安堵してにりと笑つた。だがその笑ひは五秒とたぬうちに一變してしまつた。

「これなあに……」

妻君はお碗をのぞいて舌を出したりひつこめたりしてゐる。

「けんちゃん汁ぢやないか。」

僕は幾分癪にさわつて

「お前はけんちゃん汁を知らんのか。これはけんちゃん汁の王様だ。」

さう云つてお碗を手にして一口飲み、あつと聲を出してしまつた。

「變でせう。」

すかさず妻君が一本うちこんで來た。まさに面ありである。

「あなた、ソースをお醤油と間違つたんぢやない。」僕は何か云つてよいか迷つてゐた。ソースとお醤油の區別がつかんやうでは亭主の威厳にかゝる重大問題である。そこで僕は苦しい答辯をしてしまつた。

「お前にはソースの味がわからんのか。フランスあたりのけんちゃん汁に似通つた料理は、みんなソースでやるのだ。仲々風味があるだらう。」

もつて行つた。

「お茶を召しませ。」

妻君は樂しげに笑つて、

「なんだかくすぐつたくなるわ。」

と、顔を赤くしてゐた。そのくせ火鉢に火がないことを注意した。ちやつかりしたものである。

僕はあわてゝ十能に火をとり座敷にもつて行つた。三月の末でまだ寒かつたし、ふだんから僕が朝起きると火鉢に火のないことをとても嫌がつてゐた事を、今逆に妻君から云はれたのである。

ところが、こゝで又僕は失敗してしまつた。あんまり急いで歩いたので、十能の炭火が踊り出して疊をこがしてしまつたのである。

僕は猿が木から落ちたやうに眞赤な顔をして臺所に逃げむと、水をがぶ／＼のんでほつとした。

それから二十分ばかりして、僕はやうやく御飯の用意を完了し、妻君の前にお膳を出した。

「まあすこい御馳走ね」

「なあに、こんなものは癪巻だよ。」

やなぎといふ鱈の焼いたのに、けんちゃん汁。それにほうれん草のおひたし。僕等貧乏人にとつては豪華版である。而も朝の食事であるから妻君が愕きあやしむのも無理がない。

「……大丈夫？」

この大丈夫といふのは他の人にはわからぬが、僕には

いや、變な事をいつたものである。しかし、新しい料理法が現代に生れて悪いことはない。

僕は冷汗をかきながらけんちゃん汁をがぶ／＼のんだ。

すると妻君が急に笑ひ出した。とてもおかしくてたまらぬといつた風に笑ふのである。その笑ひにはいや味がなかつた。かういふ時の心理といふものはおかしいものである。妻君があんまり笑ふので、僕もなんだか知らぬが腹の皮がゆるんで笑ひがこみあげてきたのである。

「ハ、ハ、ハ、ハ」

「フ、フ、フ、フ……フランスのハ、ハ、ハ、ハ」

けんちゃん……

しばらくの間は笑ひがとまらなかつた。妻君は横腹がいたいとお腹を押さえて笑つてゐたが、しまひには座敷から逃げ出してしまつた。

朝の食事が終ると、僕は豫定の行動にうつた。今日一日妻君をいかにして慰安するか、眼目である。

「何處へ連れて行つて下さるの。」

「天國だ。」

僕は妻君をせきたてゝ家を出た。豫定の時間より三十分遅れてしまつた。妻君の化粧と着附にひまどつたのである。(女といふ人間はやつかいすな)その爲に市行きのバスに乗り遅れてしまつた。

僕の町から市まで約十二五米。その間を往復バスが三十分をきに出てゐる。僕等は行き違ひになつたバスをうらめし氣に見てバス車庫の行列に加はつた。

「ひどく並んでるのね。」

「うん、このごろは並ぶことも一つの仕事さ。自動車の有難味がわかるよ。」

僕と妻君は行列のどりに喰ひさがる。すると、いつものことであるが、みんながぢろ／＼僕等を盗見しては、何か興味しん／＼と、眼で、口で話し合をはじめる。言論は自由であるが、こそ／＼話されることはあまり氣分のよいものではない。悪口が大半なやうな氣がする。

どうも我々民族には變な傾向があるでずな。僕等が東京から疎開した當時はもつとすこかつた。妻君は初めてそれを嫌がつてゐた。何だか見せ物にされてゐるやうだといふのである。大体、僕の経験では、田舎はのんびりしてよいなどとかす奴はウソ吐きである。妻君も僕と同意見であるが、田舎位不自由で息のつまりさうなところはなないのである。一つの服装にも、一つの買物にもいやうるさいのなんのつて問題外である。その點都會はよろしい。特に僕等貧乏人は周圍に氣兼ねなしに生活が出来ただけでも有難いことである。何をしやうと、他人様に迷惑をかけなけりやいぢやないか。

僕は妻君とくだらん神經を使はんことにきめてゐるので、馬耳東風。べちやくちやく／＼やつてゐる連中を尻眼に愛妻ぶりを發揮してやつた。

先づ、妻君にバツ／＼と眼で愛情の電波を送る。

「氣にかけるな。」

すると妻君はこくりとうなづき、小指を唇のところへ

持つてゆきながら、あるかなしの微笑をする。

「大丈夫ですわ。」

あゝ、讀者諸君よ、このあるかなしの微笑こそ、絶対に他の女性には眞似の出来ぬ深遠なる愛情と信頼がこもつてゐるのです。

恐らく、おそらく僕はいいたいのである。

「創世以來の數知れぬ男や女が交したであらう。かなしい／＼千萬言の愛の言葉にもまして、僕の妻君の愛は素晴らしいのです。」

そこで僕は提言する。

「世の愛し合へる人々よ。君達はもつと自分達の愛に自信とうぬぼれをもち給へ。」さすれば邪魔者は退散するものである。

僕は右の信念をもつて妻君に云つた。

「疲れたかい。」

「えゝ、あなたは……？」

「僕は男だからヘイチャラだよ。」

「でも、この前に坐骨神經痛が起きて困つたちやありませんか。」

この時僕の前後の行列から笑聲が起つた。

「しまつた。」

僕は心の中でかう叫ばざるを得なかつた。妻君も自分の言葉に氣附いてか、赤い顔をしてうつむいてしまつた。とんだ處でばろを出してしまつたものである。然し僕はこの位の事でぢろ／＼やうな弱虫ではない。

「でも、お前がゐてくれて助かつたよ。」

僕はわざと大きな聲でいつてやつた。

「それに、とても寒かつたんですもの。今日のやうに

いゝお天氣ぢやなかつたわ。」

妻君の聲には、何か必死な——決意にみちたひびきがふくまれてゐた。僕を擁護しやうとする一生懸命な女心が哀しいまでに含まれてゐるのである。

行列の連中はそれからだまつてしまつた。

やがてバスが來た。バスは満員であつた。僕はがたひしゆれる満員の車内で、それこそ荷物のやうに重り合つた乗客の混雑と危険から、妻君を押しつぶされないやうに警戒し、守護をおこなつた。

市近市近くの街道でバスが大きくバウンドした時に僕は妻君の手を離してしまつた。こいつはいかんとあわてゝ自分のそばにある手をつかんだら、どうしたものかふりきるやうにひつこめてしまつた。あとで、よく考へてみたら、それはよその女の人の手であつた。聲をたてられたり、妻君に見られたら、又赤面するところであつた。

市の驛前に到着すると、僕は開放された小鳥のやうにはつとした。妻君は泥んこになつた目足袋を泣きさうな顔で見てゐた。

僕の赤タン。(赤の短靴の事です)は黒タンになつてゐた。

しかし、そんな事は氣にするだけ野暮である。

「生命保険の世話にならんのだからいゝさ。足袋は洗濯病院ですぐなほろぞ。」

「さうねえ。」

妻君は忽ち元氣になる。青空のもと、颯爽と彼女、肩をぶつ／＼け合ひながら歩くのである。

「日曜は人間の服物を消耗させる爲にあるんだよ。」

僕は妻君にそんな愚にもつかん話をしながら、豫定のコースを先づ三階建のデパートへと案内した。

「さあ、好きなものを買つてやるぞ。」

もつとも、金×圓也と限定されてゐる僕のわびしい財布である。それでも妻君はたのしくつてしややうがないとみえて眸を輝かし、

「うれしいわ。」

といふのである。

あゝ、いとけなきつまよ、

おまえはなんといふをんなであることよ。

かなしいといふとき、

うれしいといふとき、

さんごくであるほどに、

かゞやかにひかるめをもつおまえは。

僕は人が見てななかつたら、きつと妻君を抱きしめてゐたゞらう。食しさといふものは苦痛ではない。苛酷なものや悲惨ばかりをもたらすものではない。ときには僕等のやうに、富める人には味はふことの出来ない、しめやかな愛の情にゆあみすることが出来るのである。

妻君が求めたものは、五枚一組三十五圓の桐の葉を浮出しにして、縹々たる小皿と、白地に青磁色の鳳凰が雲上を翔んでゐる大小の湯呑みであつた。

「少し高いものを買ひ過ぎたかしら……でも、記念ですものね。」

妻君はさういつてまぶしさに笑ふと、買物包みをさも大切さうに抱えてデパートの階段を下りた。

「今度は何處へ連れて行つて下さるの。」

デパートの入口に出ると、楽しくつて「しやうがないといふ風に、小首をかしげて聞く彼女である。」

「住吉軒のおしるこだ。甘いぞう。」

「ほつべたが落ちるほど。虫歯が出来るほどにね。」

妻君は仲々ウィットに富んでゐます。

「さうだよ。あこの饅番がたるむほどだ。」

住吉軒はデパートの横通りをよぎつて二分ほど歩くと甘い／＼と書いたのれんを春風にぶらんこさせながら僕等待つてゐた。

おしるこを二杯。ぜんざいを一杯。(これは晝食の代用です)をゆつくりあじはひ。僕は妻君の唇の横についてたあんこを誰も見て居らぬのを幸に、素早く指ですくつてなめると、さてといつて立上つた。

それから一時間ばかりは、買ひもせぬ家具を見たり、雑貨店をあちこちのぞき歩き、丸本といふ本屋で妻君に婦人公論を買つてやつたりしながら、k市の町をあきも

しないで歩いたのである。

「随分歩いたわね。」

「うん、人生とは歩く事だからね。お前と始めて會つた時も歩いたぢやないか」

「でもあの時はだまつて歩いてましたわ。」

妻君は昔を思ひ出してゐるらしかつた。歩きながらしのび笑ひをしてゐた。きつと僕が、どもりながら彼女に愛を打附けた時の事が、ゆくりなくも浮んだに違ひない。今の僕はよく喋るが、その頃の僕はよくどもつた。しかし、愛人と話をするときは、すこしどもつた方が感じの出るものである。もつとも、僕は戀をうちあけるのに困つたと相談をしに來た或友人に、どもりながらうちあけるとすゝめて失敗したことがある。

友人は相手にふられた上、本當のどもりになつてしまつたからである。

いよ／＼最後のコースである。

世紀の戀戀、「うたかたの戀」を見るべく僕と妻君はシネマパレスの暗い場内に入つて行つた。

物凄人人で、スクリーンは半分も見えない。僕は視界の見通しがきかず、ぼや／＼して誰かの背中にぶつかつてあやまつたりしながら、どこかによい場所があいてないかと物色してゐると、妻君が僕の手を引つぱつた。

かういふ場合には妻君の方が眼が利くのか、頭腦的にすぐれてゐるのか、兎に角場所さがしはうまいものである。

だから退屈がまぎれてよいものである。

「うくつだい？」

と、俺が聞くと

三十三

變な數を妻君がひひ出した。俺は「五十」と答へて、おもむろに一粒宛喰ひはじめた。途中でバスが早く来るやうな氣がして、するい事を考へ、一度に澤山ほうばつて喰んだら、ガリつといつた。あわてゝ出したら、それは石であつた。

やうやくバスが來た時は、妻君が持つてきた三百七十粒の豆はすつかり喰つてゐた。

やがて僕等はバスにゆられ、家に歸つて來た。かくしてこの日はくれたのである。

その夜、僕が遅い夕食後の煙草を吸つてゐると、鳳凰の湯呑みに、新しいお茶を入れて妻君が靜かに僕の前に座り、

「今日は本當に有難うございました。」

と禮をいつた。ひやうきんな僕は、かつてそんな言葉を改まつてうけた事がないのであるが、その夜はどうしたものか、ぐうの音も出ずに妻君を見つめてゐた。

ひとのこゝろをあらふ言葉、まごころといふなら、僕は妻君にそれを見たのだと考へた。

よい氣持であつた。何ともいひあらはしたいよい氣持であつた。僕は心の中で、本當に女房祭りをしたよかつたと思つたのである。

(終り)

僕はお里に手をひかれる澤市のやうに、妻君の手につかまつて／＼歩いて行つた。

「うたかたの戀」は、短評して名匠の繪畫にほこりのかゝつてゐるやうな映画である。脚本が散まんとしてゐて、ダリニーのうい／＼しい委や、ボワイエのラストシーンに於ける演技のよさをのぞいては駄作であると思つた。そして、主人公のプリンスが人間の不自由さをかこつのなら、日本の陛下は不自由の骨頂であらうと妻君に話してやつた。

映画館を出ると四時半であつた。僕はバスの時間に遅れては大變だとばかり、小走りに驛前に急いだ。歩きながら妻君が、何度も最後のシーンが美しかつたと感歎し、僕がプリンスだつたらどうするかと聞いた。驛前のバス車庫に來てみると、皮憎なもので、今度はバスの奴が遅れて、三十分も僕等はそこで行列をさせられた。

「走つて來るんぢやなかつたわ。」

さう云つて妻君が、僕の手に大豆のいつたのをそつとにぎらせた。

これは妻君の得意である。そつと出して、そつと口に入れ、そつと食べて、自分の待つてゐるものは、人であれ、電車であれ、何粒食べるまでに來るかと思ひながら食べる。變な趣味であるが、やつてみると馬鹿にならな。仲々楽しいものである。二人でやる時は、何粒たべたら目的物が來るか、かけつこする。一粒宛喰べるの

——編輯手帳——

△創刊號が非常によろこばれた事を主宰者として嬉しく思つてゐる。何はともあれ、轉變多き昨今の世相に、このさゝやかな雑誌が、讀者のみなさまに、すこしでもたのしいものをもたらすによいのなら、一生懸命やらねばならぬと考へる。そろ／＼精神回復運動の聲も各地に起りつゝあり、私達のさけぶ愛の思想が結實されて行くことはうれしいかぎりである。

△小説を募集して、新人の登場を待つたが、集りがすくないのと、やたらに氣取つた作品が多いので、今月號は残念乍ら菅田君の短篇のみにした。勇氣を出して作品を送つて欲しい。

小説は、理屈ぬきに、たのしいものにした。讀者のみなさまがかかるい氣持でお讀みになり、微笑をもらし乍ら、作品に流れた精神から何かを發見していただければ幸甚と思つてゐる。

△評論の「愛の戒律」と「俳句雜考」をちつくり味はつていたゞきたい。詩の保水、流澤が今後の日本詩壇を背負つて起つことを讀者のみなさまと一語に祈りたい文藝の新しさは、これからの祖國を必ずよい方向に進ましめることを信じてゐる。

童謡詩人の額賀氏の「春」を少年少女のみなさんに贈る。高價の雑誌で申譯ないが、これが一杯なのですからアメをなめるつもりでがまんして欲しい。

(ケツシ)

△第二號は創刊號のときよりも苦しまないで出すことができた。といふのは文祭が時經るにしたがひその眞價をここの皆さんに認められ、多大なる御支援を受けてゐるからである。まことに有難いことである。ところでこのとき、中央から河内氏を呼び戻す聲のあることは、われ／＼として氏はやるに忍びない。しかし幸ひに河内氏はこの土地内に終生の文化活動を念じてやまないといつておられるから、われ／＼としてもこの意を損ふことのないやうに努めたいと思つてゐる。

(ハジメ)

文祭 第二號 定價十圓(送料時價)

昭和二十二年六月一日印刷
昭和二十二年六月十日發行

編輯兼發行人

河内 深 士

印刷者

福島縣湯本町表町二〇六

印刷所

佐藤 武 之

發行所

加納 印刷所

福島縣平市紺屋町一五

●文 祭 社

福島縣平市田町三九番地

地方演劇文化運動の先驅

劇團ドリーム

『文壇』編輯部推撰

河内深士・作・柴田佐千雄裝置
柴田善登・照明

寫實主義 一幕

酒井啓隆・主宰になる

「夢」の實現!!

【映畫新報所載】

河内深士・作・演出

柴田善登・裝置

柴田佐千雄・照明

牧場物語り 四幕

事務所 平市田町三九

住吉屋 内

劇團ドリーム

(電一四九)

靴。運動具
帽子

若い人の店

スガタ商店

(福島) 平市銀座街五七

御氣輕に、
あなたど、あたしのひとときを、
一杯の紅茶と美しい音楽に
ついまれて……。

みなさまのオアシス

住吉やへ

住吉やへ。

——編輯手帳——

△創刊號が非常によろこばれた事を主宰者として嬉しく思つてゐる。何はともあれ、轉變多き昨今の世相に、このさゝやかな雑誌が、讀者のみなさまに、すこしでもたのしいものをもたらすによいのなら、一生懸命やらねばならぬと考へる。そろ／＼精神回復運動の聲も各地に起りつゝあり、私達のさけぶ愛の思想が結實されて行くことはうれしかざりである。

△小説を募集して、新人の登場を待つたが、集りがすくないのと、やたらに氣取つた作品が多いので、今月號は残念乍ら菅田君の短篇のみにした。勇氣を出して作品を送つて欲しい。

△小説は、理屈ぬきに、たのしいものにした。讀者のみなさまがかかるい氣持でお讀みになり、微笑をもらし乍ら、作品に流れた精神から何かを發見していただければ幸甚と思ふのである。

△評論の「愛の戒律」と「俳句雜考」をぢつくり味はつていたゞきたい。詩の保永、澄澤が今後の日本詩壇を背負つて起つことを讀者のみなさまと一語に祈りたい文藝の新しさは、これからの祖國を必ずよい方向に進ましめることを信じてゐる。

△童謡詩人の額賀氏の「春」を少年少女のみなさんに贈る。高價の雑誌で申譯ないが、これが一杯なのですからアメをなめるつもりでがまんして欲しい。

(ケツシ)

△第二號は創刊號のときよりも苦しまないで出すことができた。といふのは文藝が時經るにしたがひその眞價をこのご皆さんに認められ、多大なる御支援を受けてゐるからである。まことに有難いことである。ところでこのとき、中央から河内氏を呼び戻す聲のあることは、われ／＼としては氏をやるに忍びない。しかし幸ひに河内氏はこの土地内に終生の文化活動を念じてやまないといつておられるから、われ／＼としてもこの意を損ふことのないやうに努めたいと思つてゐる。

「女房祭り」は楽しい中にわれ／＼の倫理を見取られる作品である。近く岡氏の「靈と詩人」が仙臺から單行本として出版される豫定であるが、ともに御愛讀下されたい。さて女房祭りが世の風潮を呼べば、面白いことである。

(ハジメ)

文・祭 第二號 定價十圓 (送料時價)	
昭和二十二年六月一日印刷 昭和二十二年六月十日發行	
編輯兼發行人	河内 潔 士
印刷所	福島縣湯本町表町二〇六 加納 藤 武 之
發行所	福島縣平市紺屋町一五 ●文 祭 社 福島縣平市田町三九番地

地方演劇文化運動の先驅

劇團ドリーム

「文壇」編輯部推撰

河内潔士作・柴田佐千雄裝置
柴田善登・照明

寫實主義 一幕

酒井啓隆・主宰になる

「夢」の實現!!

【映畫新報所載】

河内潔士・作・演出
柴田善登・裝置
柴田佐千雄・照明

牧場物語り 四幕

事務所 平市田町三九
住 吉 屋 内

劇團ドリーム
(電一四九)

靴。運動具
帽子

若い人の店

スガタ商店
(福島屋)
平市銀座街五七

御氣輕に、
あなたど、あたしのひとときを。
一杯の紅茶と美しい音楽に
ついまれて……。

みなさまのオアシス

住吉やへ
住吉やへ。

5 5 5

いつも、よい演劇
を、美しい音楽を、
そして舞踊を、
みなさまに贈るこ
とが、
わたくしの念願で
あります。

平市南町

川徳演藝社

川和徳一

日本の民主化は
藝能文化から！
祖國の再建は
同胞愛より！

演劇、音楽、
一般藝能の御相談
は鈴重へ！！

常磐線平市

鈴重興行社

電話四二二番

映畫のスクリーンは
あなたの
あこがれです。
そのあこがれを
實現させるのが
當スタジオの
技術です。
美しく、より
美しく……こ
ねがふのは人間の
本性ですからね。

新スタジオ設置

延松寫眞館

御用命ハ廉價ヲ
『モットー』トシ
修理ハ敏速正確ヲ
期スル……當店へ

營業品目	○各種時計	○眼鏡	○貴金屬	○蓄音器	○レコード	○喫煙具
デラオ電	販賣	修理	部八	新設		

平市銀座街

誠光堂

平市驛前

誠光堂支店